

苦手意識を抱かせない教育コンテンツの研究・開発

— 図画工作・美術に対する苦手意識解消の試み —

降 簾 孝

山形大学 教職・教育実践研究 第13号別刷

平成 30 年 3 月

苦手意識を抱かせない教育コンテンツの研究・開発

— 図画工作・美術に対する苦手意識解消の試み —

降 旗 孝¹⁾

本研究の目的は、多くの人々が抱いている図画工作や美術に対する苦手意識に着目し、その苦手意識を少しでも減少させ、それをつくらせない教育内容を模索し、具体的な教育コンテンツを開発することである。研究の経緯としては、第1段階に児童・生徒が抱く苦手意識の実態を調査すると共に、苦手意識を抱かせる原因について考察してきた。第2段階に、その原因の考察から苦手意識をつくらない要素を明らかにし、実際の大学講義を通してその中で検証してきた。第3段階として、その検証と考察の過程から、苦手意識をつくらない有効な教育コンテンツのいくつかを明らかにした。

実際の講義において苦手意識を減少させることができたが、その方法としての新たな課題も出てきた。そして、苦手意識をつくらない教育は目指すべき造形教育の実現に他ならないと再確認できた。

キーワード： 苦手意識、図画工作教育、美術教育、教育内容、教育コンテンツ

1 はじめに 研究主題設定の理由と背景

我が国の現状を客観的かつ冷静に直視してみると、美術表現を心から楽しんでいる人の陰に、美術に対して苦手意識を抱いている者が想像以上に多く存在している。

それは、子供だけにかぎらず大人にも多く見られる傾向であり、この傾向は図画工作を日々教えているベテラン教師たちにもあることがわかってきている。¹⁾ また、小学校教員を目指す多くの大学生たちにも大なり小なり苦手意識があることも明らかになってきた。²⁾

しかし、苦手意識などというものは、人間の好き嫌いや得意・不得意があるのと同様に、特に問題視する必要がないととらえる見方もある。現に、この問題はそのように扱われ見過ごされ続けてきたのが現在の状況といえよう。

ただ、この苦手意識が抱かれた原因や理由を考察すればするほど、問題の深刻さと重要性を認識するようになってきた。そこで取り組むべき研究課題と考えた。

つまり、苦手意識にはそれが根付くような教育環境があり、教科のイメージが形成されるばかりでなく価値観や規範までも植え付けてしまうからである。それが教員であれば、教育行為によって同じような価値観を子どもたち自身にも植え付けてしまう危険性を孕んでいる。

現在担当している教員養成の立場からは、教師が児童・生徒に対して図工・美術の苦手意識が生まれるような学習環境はつくらせてはならないと考えた。

本研究は、平成 26 年度から 28 年度までの 3 年間かけて、苦手意識の実態調査と共にその理由の考察から、苦手をつくらない要素を明らかにし、実際の講義を通して実証しながら苦手意識をつくらない教育を探求してきた。そこには、いかなる教育内容が必要であるのか、そして有効な教育コンテンツのいくつかを開発してきた。

本論では、教えるべき内容を「教育内容」として、そしてその理念や方法も含めた有効で具体的な教育内容を総称して「**教育コンテンツ**」として使い分けている。

2 児童・生徒の図工・美術の実態

(1) 図工・美術に対する意欲について

研究の第1段階として、図画工作・美術における〔意欲〕と〔苦手意識〕について実態調査を実施した。³⁾

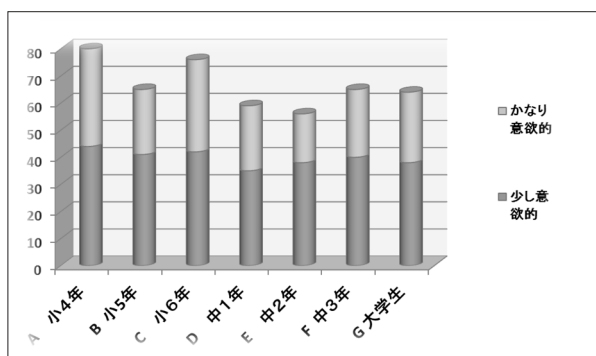
調査対象は、4年生以上の小学生 271名の児童、2校の中学生全クラス 988名の生徒、2校の県立高校の芸術科目（美術）を選択した 216名の高校生、そして大学にて教職科目を受講する4クラス合計 131名の大学生に実施することができた。全調査数は、1606名である。

調査を実施し終えて、全てを対象とする義務教育段階と芸術科目の1つとして美術を選択してきた高校生とは、

1) 山形大学 地域教育文化学部

実質的に比較対象に成り得ないと判断し、今回は調査考察対象から高校生については除外して考察した。

調査結果から、以下のグラフ1のように小学生から大学生まで図画工作や美術に対する〔意欲〕については、小学4年生の8割を最高に中学2年生でも6割近くの児童・生徒は、概ね意欲的に取り組んでいることがわかった。また教科としての好き嫌いという認識の多少の違いはあっても、図画工作や美術に対して意欲をもって臨んでいることもわかった。



【グラフ1：図工・美術への意欲：縦軸%】

この意欲の重要性については、図画工作・美術に限らず学習活動全体にかかわり、その教育成果を大きく左右する程重要な位置を占めている。

「学習意欲の有無、その状態がどのようなものとして学習の場において持続していくものであるかは、学習活動の出発点として重要であるだけでなく、学習活動の全体、さらにそこで獲得していく学習内容の質、学習者の成就感をも左右していく重い意味をもっている。」⁴⁾これは全ての教科に通じて言えることかもしれない。

さらに、この意欲は、学習に向かう姿勢の前向きな側面だけでなく、豊かな表現の根本である内面の発露の部分にも大きく関わるので、その重要性は他の教科の比ではないだろう。それだけ児童・生徒の図画工作・美術への〔意欲〕は重要事項と言える。

図画工作や美術に対してあまり意欲を持って取り組めない児童・生徒の存在もあり、それは造形美術教育をより良くするためには無視できない現状である。

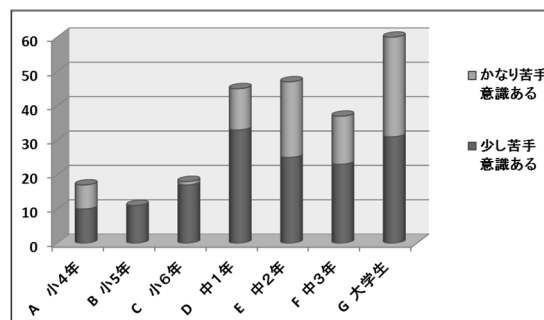
なぜ、意欲が出ないかの理由を調べると、苦手意識があることや人と比べて劣等感を抱いてしまっているケースが多いことがわかった。「意欲がない」と応えた児童・生徒の理由を調べるとほぼ100%なんらかの苦手意識を抱いていることがわかった。このことから意欲と苦手意識とは、かなりの相関関係にあるといえる。

図画工作・美術教育をより良くするために意欲を高めることも大事であるが、それより前に苦手意識が生まれる原因を追及し、それをなくすような学習空間があつて、

初めて意欲を高めることができるものとする。

(2) 図工・美術に対する苦手意識について

苦手意識については、調査結果から、小学生段階では2割未満で苦手意識は少ないが、中学生になると一気にそれが5割近くに増加するという。それが、大学生になるとさらに増加して6割近くになることがわかった。



【グラフ2：図工・美術への苦手意識：縦軸%】

児童・生徒の苦手意識は、どのような理由から生まれてくるのであろうか。苦手意識がないと応えた児童・生徒の理由から、「好きだから」を理由にした児童は、小学生3学年で47名、中学生3学年で28名いた。次に、「楽しいから、面白いから」を理由にした小学生は46名、中学生は24名いた。このことから、苦手意識がない児童・生徒は、好きで楽しく面白いという経験を実感し、そこから肯定的な意識を持っていることがわかる。

逆に、苦手意識があると応えた児童・生徒の理由については、圧倒的に多いのが「下手だから、うまくできないから」と書いた小学生は21名、中学生は50名いた。それも、絵に限定して「絵が下手で、絵の自信がないから」と理由を書く児童も多い。ここに、苦手意識を抱く児童・生徒は、うまくできないことや下手であると意識していることが主な理由になっていることがわかる。

図画工作がとても好きでかなり意欲的、そして苦手意識が全くない小学4年生の10歳男児は、苦手意識がない理由として、「なんでもやってやろうと思うから、そのけっかおもしろい事ができるから。」とその理由を書いていた。10歳男児は、「ぼくは、絵がへたとかうまいとかは、あまり関係ないと思うし、その工作に思いをこめていけば、ぼくはいいと思うから。」と書いている。

このように苦手意識を抱いている子どもの意識と抱いていない子どもの意識との根本的な相違がある。さらに苦手意識が生じる原因には、当事者自身の問題だけではないことも注目する必要がある。理由の中には、「人と比べてしまうから」とか「人から笑われるから」というものがあつた。ここに、人と人との関係の中で苦手意識を生み出してしまつていく状況があつて、それが苦手意識を助長し

てしまうことに着目したい。意欲と苦手意識は、集団としての人的環境も重要な要因といえるかもしれない。

田上不二夫は、人と人の集まりである集団と「やる気」との関連性についてこう言っている。

「仲間や集団の中で自分がどのように生きるかというイメージが、人間関係や集団活動での『やる気』に影響する。学級で『群れ』の経験をする重要性が増しているように思う。」⁵⁾

学級における集団は『群れ』をなし、学習空間を形成している。一人ひとりの『やる気』を引き出し、逆に苦手意識を植え付けさせ意欲を喪失させる重要な要因と言える。

3. 苦手意識に関する先行研究

図工・美術に対する苦手意識に関する先行研究は、それほど多くない。美術教育関連学会の学会誌から検索する。

研究論文としては、篠木麻希の「描画における苦手意識と上手下手の考察」(2009)があり、表現したいことを描けることで満足を得られるのであって模倣も含めた技術指導が必要としている。また石山徹他の研究(2015)では、描画を苦手とする人に対して、マトリックス線を用いた模倣描画法を提案している。

これらの論文では、苦手意識の生まれる原因への追究というよりも表現の技術指導や模倣によって苦手意識を克服しようとするもので、本研究の方向性とは異なる。

故に、先行研究の観点からも苦手意識そのものに正面から取り組んだ所に本研究の独自性が存在している。

また、苦手意識そのものの問題点については、今から20年前の論文において次のようにある。

「毎年講義の初日に『小・中学校を通して好きな教科と嫌いな教科』のアンケートをしていた。残念ながら図工や美術は、いつも嫌いな学科の上位にランクされていた。理由は圧倒的に多いのが『下手だから』という回答で、その内容は写生画が多い。美術の学習能力を、いわゆる上手下手といった巧緻性や技術、または特殊な才能の問題と受け取られてしまっている」⁶⁾

山形大学の調査では、図工・美術に対しての意識は、かなり嫌いが7%、少し嫌いが18%であったので、否定的な意識をしているのは全体の25%であった。しかし、美術が嫌いになる理由が「下手だから」ということから、苦手意識は20年前から確実に存在していたことになる。それだけ、苦手意識は根深い問題なのかもしれない。その課題の解決も容易でないことがここからもわかる。

4 苦手意識を解消させる試みと検証

(1) 実際の授業による苦手意識解消の試み

前述の調査結果から、一番苦手意識の割合が高かった小学校教員養成課程の大学生を対象に、実際の講義を通して苦手意識解消の様々な試みを行って検証してきた。

具体的な試みの例を上げると

- ・講義ガイダンスにおける学習経験のふりかえり
- ・苦手意識の実態を講義アンケートから把握すること
- ・図画工作・美術のイメージや概念を確認すること
- ・図画工作・美術教育における大切にすべきこと重視
- ・図画工作・美術教育で子供たちに求めることの考察
- ・表現活動において重視すべきポイントを強調
- ・授業展開における教師の役割を考察し理解させること
- ・教師は児童・生徒の表現にどのように向き合うのか
- ・水彩絵の具等の有効な使い方や指導の仕方
- ・造形表現の楽しさやその魅力を題材研究に取り入れる
- ・表現の良さを認め合える鑑賞活動を重視
- ・図画工作における評価観点を明示すること
- ・学校現場の教師を招いて教育を語ってもらうこと
- ・実際の授業ビデオを見ながら考察すること

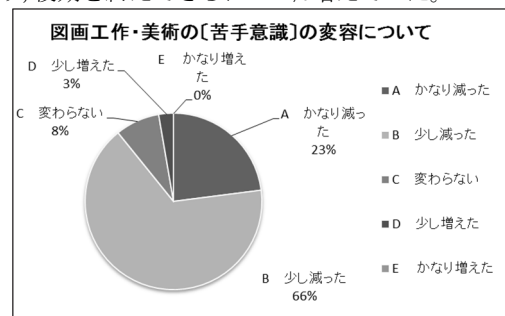
など

この様々な試みの実際の効果を確認するために、講義の授業前と授業後に調査を行い苦手意識の変容を調べてきた。そこでは、変容だけではなく変容をもたらした原因についても自由記述させた。

最終年度の平成28年度には、変容をもたらした理由について順位をつけて記述してもらうことで、変容させた理由の影響度について数値化することができた。

(2) 授業後の苦手意識の変容

1年後の苦手意識の変容については、以下のグラフ3のように苦手意識が減った学生は全体の89.2%にあたる。前期終了時にも調査しているが、その時には88.0%であり、後期を終えてさらに1.2%増えていた。



【グラフ3：苦手意識の変容】

面白いことに、最初に苦手意識がないと応えた学生も苦手意識が減少したと自覚していたことである。

ここに、教育によって図画工作・美術への苦手意識を減少させることを改めて再確認することができた。

また、平成 27 年度には 1 人もいなかったが、28 年度には苦手意識が少し増えたという学生が 2 名いた。その理由についてその中の 1 人は、次のように書いている。

「上手な作品を作るなら上手だと思った人の表現の仕方を真似して取り入れれば良いが、自分らしいを表現するとなるとまさる状態から何かを生み出さなければならぬので難しいと思ってしまった。」⁷⁾

これは、とても貴重かつ重要な感想であると考えた。授業で一貫して強調してきた上手ではなく自分らしい表現となると、表現そのものの根本的ともいえる重要な壁にぶつかることになる。

この壁にぶつかり試行錯誤しながら、苦勞して工夫してそれを乗り越える所に、自分らしい表現がある。教育によって苦手意識そのものを大幅に減少させることはできたが、学生の中には新たな課題が生まれて別の意味での苦手意識が生じてしまうことも確認することができた。新たな研究課題として取り組む必要が出てきた。

(3) 苦手意識の変容をもたらした理由について

授業後の調査では、苦手意識の変容と共に、それをもたらすのに影響があった原因についてもきいている。

最終年度の平成 28 年度においては、その影響の度合いを明確にするために数値化することを試みた。影響があったと思われる順に順位をつけ 1 番影響があった 1 位から 5 位までの順で自由記述してもらった。それを数値化するために 1 位－5 ポイント、2 位－4 ポイント、3 位－3 ポイント、4 位－2 ポイント、5 位－1 ポイントで計算した。ポイント数が高いほど影響があったことがわかる。

原因で 1 番多かったのが「自分らしい表現を目指すことが大切だとわかったから」だった。37 名が第 1 位に影響があった原因としてあげており、第 2 位も 22 名いた。合計 279 ポイントで 1 番多かった。

次に影響があったと思われる原因は、「上手下手で評価するのではないことがわかったから」だった。第 1 位は 28 名で合計 140 ポイントであった。自分らしい表現を目指すことと共に上手・下手で評価しないことをセットで強調し指導することの重要性が明らかになった。

総ポイント数で 2 番目に高かったのは鑑賞活動に関するものであった。「鑑賞活動で自分らしい表現の良さを発見したから」であり、影響のあった順位としては 3 位

以降に多く上げられていた。合計 142 ポイントであった。

このことから図工・美術では、表現ばかりでなく鑑賞活動も併行して重視する必要性を実感することができた。

5 苦手意識を抱かせない要素

授業前後での調査から苦手意識の変容をもたらした理由を深く考察することで、苦手意識を減少させることのできる要素のいくつかを明らかにすることができた。

(1) 上手・下手の呪縛から解放させること - 要素①

苦手意識を減少させる要素の 1 つには、今までの経験から作り上げられたうまく上手につくらねばならないという教科観や教科のイメージの呪縛から解放させることであろう。それは苦手意識が減少した理由で多かったのが「上手下手で評価されることがなかったから」であったからである。ここに、苦手意識のある人は、出来上がった作品が上手・下手で評価されることに精神的に強く縛られていたことがわかる。

図工・美術は、芸術家やアーティストなどのプロ作家を目指す一部の子どものための教科ではない。それは、H リードも次のように主張する。

「われわれはもはや、ごく少数の子どもを、芸術的素質といわれてきたものを尺度にして、選り抜いて、この少数者を芸術家となるように教育はしない。」⁸⁾

もし上手に作品をつくらなければならないという価値観があれば、抜本的に意識改革させる必要があるだろう。

ローエンフェルドも子どもの絵に写実的なつりあいが、重要な要素であるかどうかを決めるのは、唯一子ども自身であるとし、次のように述べている。

「表現形式を押しつけられると、子どもは抑圧され、子どもの創造力、子どもの芸術活動、ひいては個性までしぼんでしまいます。」⁹⁾

写実的なつりあいのとれたうまく上手な表現形式を押しつけられたり求められたりすると、子どもの創造力を伸ばすどころか、ひいては個性をも伸ばせないと言っている。このように大人の視点や価値観の呪縛から子供たちを解放させることで、自由な表現を求めていきたい。

(2) うまさより自分の表現を目指すこと - 要素②

次に苦手意識を減少させることができた原因で 1 番多かったのは「自分らしい表現をめざすことが大切であるとわかったから」であった。上手な作品を目指すのであれば何をめざすのか、それが自分らしい表現を追求することであり、個性や独創性の育成にも繋がる重要な

要素でもある。これは教科の大切な目標でもある。

教科の目標は、作品を上手につくることよりも一人ひとりの思いやイメージをもとに、自分らしい表現を目指すことであり、それを重視することが求められる。

当然、評価についても上手にできたかどうかではなく、自分らしい自分だけの表現をいかに試行錯誤しながら工夫して取り組んだのかが問われることになる。上手・下手で比較する見方から一人ひとりの表現のよさと工夫とを見つけ合い認め合うことが重要になってくる。

（3）表現を可能にする用具の知識・技能 - 要素③

苦手意識を減少させることができた理由の一つに、「水彩絵の具の使い方を知ることができたから」「クレヨン・パスの可能性を知ったから」など、用具に関するものを理由にあげている学生も少なくなかった。

また「パレットの使い方を初めて教わった」とか「混色の仕方を学んだ」という感想もあり、この用具に関する基礎的な知識や技能なくして、苦手意識を解消することなど不可能であると考えた。

第1の要素と第2の要素と共に、それを実現することを手助けする用具の基礎的な知識とその技能は、苦手意識を生じさせないための不可欠な要素といえる。

（4）表現本来の楽しさを味わわせること - 要素④

苦手意識が減少した理由の記述の中に「表現の楽しさを味わうことができたから」があったこと。今までは、表現を本当に楽しめなかったことを裏付けている。

絵画表現では写実的に眼に見えるように再現できることが価値の高いものとして捉えられてきた歴史がある。現在でもその傾向は根強く残っているようだ。

「芸術の表現というものが、単なる自然の再現ではない、造形としてのおもしろみを発揮すべきものであることを、身を以て体験せしめるように導くことである。子供の図画教育が、単なる絵を描く技能の習得であるとされた時代は過ぎた。」¹⁰⁾

（5）自分らしい表現が認められる学習空間 - 要素⑤

苦手意識が減少した理由の中で特に注目するのは、「グループの仲間から、上手でなくて〇〇らしく自分らしさが出ていると褒めてもらったから」「友だちから認めてもらったから」という記述を何名かの学生がしていた。

表現は個人的な営みではあるが、内面的なものが表に表れたものでもあり、それを受容する第2の存在がいるかないかでは大きな相違が生じると考えられる。

「子どもたちの意欲を支え、育てるものは、ただ1つ描いた絵がだれかに受けとめられるということである。教師が、あるいは親が、その絵に共感し、受容し、そして感動してやるのが、子どもたちに描きがいを実感させ、新たな意欲を燃え立たせるのである。」¹¹⁾

年齢があがるにしたがいグループ内の他者からの評価や褒め言葉が、かなり影響があることがわかった。

一人ひとりの良さを認め合い褒め合えるような学習環境が重要である。これはグループだけでなくクラス全体としてお互いに表現を認め合える温かな学習空間の在り方が、造形美術教育においては特に求められる。

「ここでいう学習空間とは、児童・生徒や教師によって意図的・無意識的に形成されている教育規範・価値観をさしており、評価を含めた造形美術教育のあり様を大きく左右し、その結果、大きな教育格差を生み出すことになっていると考えている。」¹²⁾

この学習空間は、教えるべき内容を第1の要素、それを教える指導方法を第2の要素とすれば、学習空間の質は第3の要素といえるほど重要である。

鈎治雄は、潜在的なカリキュラムの視点から学習空間が子どもたちに与える影響の大きさを述べている。

「公的なカリキュラムの枠を越えた人間関係や集団の雰囲気、規範への適応をとおして、子どもたちが学習し、獲得する価値観や態度といったものは、ある意味では教育課程において企画され準備された内容や教材以上にはるかに大きな影響を持ち得ることが予想される。」¹³⁾

苦手意識を生み出さない目指すべき造形美術教育を実現するためには、この学習空間の質に着目し、それをより良くすることが重要な要素の1つであると考えられる。

6 苦手意識を抱かせない教育コンテンツ

次に苦手意識をつくらない要素をもとに、効果のあった教育コンテンツを明らかにすることに努めてきた。

平成26年度の第1段階から平成28年度の第3段階まで、繰り返し実施しながら修正と改善を積み重ねて次のような教育的効果のあるコンテンツが焦点化された。

（1）教育コンテンツ①

過去の学習経験のふりかえりと教育観の確認

最初の教育コンテンツとしては、児童・生徒たちが今までに受けてきた学習経験のふりかえりと図工・美術で大切にすべきこと、いわゆる教育観の確認が重要であると

考えた。

これは、要素①の上手・下手の呪縛から解放させるため、個々の教科イメージを確認するための必要な前段階でもある。そのために個々の児童・生徒の実態をまず把握する必要がある。授業開きとも言えるガイダンスの際には、実態調査を兼ねて子ども達一人ひとりが受けてきた過去の教育についてふりかえる。

抱いている苦手意識の有無には、個々によって相違があり、個別に対応する必要があるからである。どのような教科のイメージなのか、その相違や実態を把握することである。この教科イメージは、子ども自身が受けてきた図工・美術教育の反映でもあるが故に重要なのである。

「苦手意識を減少させるためには、今まで抱いていた『うまく上手に作品をつくらねばならない』という固定概念や価値観を変容させることが重要な要素の1つと考えた。」¹⁴⁾

これを確認することで、要素①で問題にしていた「上手に作品をつくらねばならない」という呪縛状態にあるのか、ないのかを客観的に判断し把握することができる。

もし、否定的なイメージの場合には、上手に作品をつくらねばならないという価値観の学習風土の中で、まわりの人などから冗談で冷やかされたりして、嫌な思い出や経験をしているケースが少なくない。

このことから、肯定的なイメージはさらに強化させ、もし否定的なイメージがある場合には、それを教育によって肯定的イメージの方向に変容させる必要性が生まれる。

(2) 教育コンテンツ②

図画工作・美術で大切にすべき事・目標

次なる教育コンテンツとしては、この教科で何を大切に、この教科で何を目指すべきなのか、教科の目標とも併せて確認すると共に児童・生徒自身に理解させることが重要であると考えた。

これは、どうしても図画工作・美術で作品作りを重視している傾向への対策として要素①の上手・下手の呪縛から解放させるためことから要素②に移行させることに直結するコンテンツと考えている。

その具体的な手段として、学習指導要領に明示されている教科の目標とも関連して教育する必要がある。

小学校低学年の児童には、その発達段階に応じた形で、中学生には小学生とは異なるより理解を深める工夫をした形で、大切にすべきことを教える必要があるだろう。

教科書についても教科の目標を理解した上で活用することが重要となる。故に参考作品例の提示ではなく目指

すべきねらいを理解するための教育コンテンツである。

「教科書は、あくまで真理・真実にもとづいた内容であること、子どもにとって楽しく、感動のわく教材が盛り込まれ、豊かな情操と確かな学力が身につくように構成されていること。」¹⁵⁾

ここで強調したいのは、教科書を教えるのではなく、教科書によって何を子どもたちに教えるていくのか、教師自身が追究していかなければならないのである。

これは、平成29年3月に公示された新しい学習指導要領における教科で育成すべき資質・能力の視点でも合致する重要な教育の方向性である。

実際の授業場面においては、題材を子ども達に提案する場面において、最初に作品づくりが目的ではないことを明確に子ども達に示す必要がある。目指すべき作品も「上手な作品」ではなく、要素②でもある「自分らしい自分だけの表現」であることを強調する必要がある。

導入段階では作品例を示すよりも生徒が自分らしい表現をイメージできるような導入の在り方が求められる。

(3) 教育コンテンツ③

表現そのものの楽しさ・面白さを体験させること

この教科における重要な教育コンテンツとして、表現活動そのものの楽しさ・面白さを味わわせるような体験を教育内容に位置づけることであると考えた。

これは、苦手を減少させるための要素④であり、苦手意識が減少した理由の中で、「表現が楽しかったから」「面白かったから」という記述が多かったからである。

今まで苦手意識が精神的な足かせになって、なかなか楽しさを味わうことができなかつた児童・生徒にとっては、表現の根源的な魅力である楽しさや面白さの実体験から大きな意識改革を促すことに繋がることのできたといえる。これは重要な教育コンテンツの1つである。

小学校低学年向きの題材として、身近な新聞紙を使った題材「新聞でへんしん」を実施してみた。身近な材料が表現の可能性を有し、多様な表現が生まれることを理解することができ、楽しめる教育コンテンツである。

小学校中学年向き題材としては、可塑性のある粘土を使うことも表現の楽しさを味わうための有効な教育コンテンツであった。題材「不思議な生き物」や「住んでみたいお城」等、アイデア次第で様々なテーマを設定し題材として取り組むことができる。

実際の授業場面では、基本的に子ども達に造形美術表現の楽しさを味わわせることが重要である。

(4) 教育コンテンツ④

苦手・不得意に挑戦する絵画表現への取り組み

苦手意識のある子どもは、圧倒的にその理由が絵の表現に対するものが多い。調査の中では「工作は好きだけど、絵は嫌いだ」とはっきり述べる者もいた。

教育コンテンツとしては、あえてその絵画表現に取り組みさせることで苦手意識の元凶となっている絵画表現を克服させ、そこから苦手意識を減少させる必要がある。

絵画表現の可能性と奥深さ、そしてその楽しさを理解してもらうことで苦手意識を少しでも解消させる必要がある。これは重要な教育コンテンツの1つである。

重要なのは要素①に関連し、絵は上手に描くことが重要でなくその呪縛から解放させる事である。物を正確に正しく写さなければならない意識から、もっと重要な事柄があることに気づき理解してもらう必要がある。

「物の形を正しく写すということはほとんど問題にされない。いかに画面に作者自身が、いきいきと個性的に表現されているか。ということが大切なのである。」¹⁶⁾

風景や人物をそのままうつすのであれば、デジタルカメラとプリンターがあれば容易に再現することが可能な世の中において、時間と労力をかけて人が絵に描くことの教育的な意義について理解してもらう必要がある。

「今一度美術教育の原点に戻って『何のために絵をかかせるのか?』という素朴な問いかけから『われわれは作品を作るために授業をしているのではない、子どもを豊かにするために、すばらしい感性や創造性を養うためにこそ表現活動があり、授業があるのだ』という当たり前の指導観に立つことによって、結果主義、作品主義を克服する必要がある。」¹⁷⁾

絵画表現では、いかにどのように描くかの前に、それを描いてみたいイメージや思いを最も重視させることが必要である。毎回それを確認させると共に、作品鑑賞や評価においても作者の思いやイメージとセットで鑑賞させることでより作品の見方が深いものになると考えた。

以上の取り組みから、苦手・不得意であった絵画表現を少しでもそうでないものに変容させることができる。

(5) 教育コンテンツ⑤

自分だけの自分らしさの表現を目指す学習経験

全ての表現活動では上手な作品作りではなく、自分らしい自分だけの表現に取り組ませることが大切であり、重要な教育コンテンツである。この教育においては、よく実践上問題となる既存のキャラクター作品とか、近くの友だちと類似した作品などは出現してこないと考える。

また実際の教育場面における多様な児童の表現を鑑賞させることで、自分らしい表現の魅力とその重要性を理解することができる。題材を児童・生徒に提案する際においては、この教育コンテンツは有効である。

しかし、自分らしい表現を目指す事は、既存のものを再現することより遥に難しい。つまり試行錯誤しながら新しい創造的な価値を生み出すことは容易ではない。

もし授業の際に、どのように表現したら良いのか悩んでいる生徒がいたら、それを引き上げクラス全体で考える場面も重要である。これは自分らしい表現をクラス全体でサポートする教育コンテンツの1つである。

この自分らしい自分だけの表現を目指す教育コンテンツは、あらゆる題材の提案する時点から鑑賞まで全ての学習場面において一貫して徹底させる必要がある。

故に机間巡視においても、一方的に教師の価値観で助言したり、アドバイスしたりするのではなく、まず一人ひとりの児童・生徒の思いに寄り添う所が重要であり、そこからアドバイスや助言が行われるべきであろう。

絵画題材については、画用紙の裏に、どのような思いやイメージを表現したいのか、最初に書かせたあとに表現に取り組んでいる。毎回それを確認してから表現に臨み、最後に苦労や工夫したことを作品の裏に書かせる。

鑑賞活動では、表の作品だけでなくこの裏書きを読んでも、この作者はどのような思いをもって表現したのか、それを表すためにどのような努力と工夫してきたのか作品を鑑賞する人たちにも理解させることができる。

この充実した鑑賞活動によって、作品の出来や完成度を見比べたりするような単なる表面的な表現の鑑賞でなく、その人の思いやイメージを大切に、努力し苦労して工夫したその人らしい本当の表現そのものを理解しようとする可以考虑。

このことは、作品の評価にも関わる重要事項であり、教科全体を支える教育コンテンツでもある。

(6) 教育コンテンツ⑥

豊かな表現を可能にする知識・技能の内容

コンテンツとして、自分らしい表現を可能にする用具の基本的な扱いや技法に関する知識・技能が上げられる。

特に、立体表現よりも絵画表現に対して苦手意識が強い傾向があり、それも水彩絵の具の扱いにかなり抵抗感がある。そのため水彩絵具を使った絵の表現は、苦手意識を克服するためには必須内容といえる。

そのために絵の具の特性を活かした用具や技能に関する基本的な知識や経験は、苦手意識を解消するためにも

必要不可欠な教育コンテンツといえる。

パレットの正しい扱いの知識から始まって、実際の混色の仕方についても具体的に示す必要がある。それは混色で表現を無限に拡張させることが可能だからである。筆のタッチを工夫することで豊かな表現が可能になる。そのために混色やタッチを練習できる場面も設定した。

自分の表現に取り組むためにも重要な教育コンテンツといえる。その動画コンテンツを作成し授業で活用した。

ここで特に注意すべきは、知識・技能の伝授が最終目標ではないということである。あくまでも生徒自身が自分らしい表現を実現することをサポートするための知識・技能であるべきであり、この点はしっかりと留意しておきたい。

(7) 教育コンテンツ⑦

お互いの表現の良さを認め合える鑑賞活動

表現だけでなく鑑賞活動も重要な学習活動である。充実した鑑賞活動をしっかり位置づけることは、苦手意識をつくらないための重要な教育コンテンツであった。

苦手意識が減った理由で「友だちの作品のうまさではなくその人の表現の良さを発見できたから」「他の友だちから自分の作品の良い所を褒めてもらったから」という理由が少なくなかった。ここにあらためて、充実した鑑賞活動がとても有効であることが確認できた。

この鑑賞活動を充実させるためには、要素①から⑤までが十分発揮されていないと効果は期待できない。

『環境が人をつくる』を再確認したのと同レベルで『人が環境をつくる』という筋道も確認し、教育環境の整備は教師の不可避の課題であり、よい造形環境が整備されたとき、はじめてよい美術教育が具現化されることを指摘しておきたい。¹⁸⁾

要素⑥のように、表現を認め合えるクラスの雰囲気や環境があつてこそ、有意義な鑑賞活動ができると考える。

教育の営みは、1つの内容や題材によって左右されるのではなく、目指すべき学習空間の中において多くの教育内容と教育実践がスパイラルに循環しながら上向きに向上していく積み重ねの行為なのである。

(8) 教育コンテンツ⑧

学習環境をよくするための褒め言葉・言葉かけ

最終年度の平成28年度には、それまで明らかにしてきた7つの教育コンテンツを実際の教育場面で有効に働かせるためには、さらに教師自身やクラスの友人たちの言動が大きな位置を占めることがわかってきた。

それは、教師や友人たちの言動が学習環境に大きく影響を与え学習空間の質やあり様を左右しているからである。教師の言動によって学習空間の質は、良くも悪くもなると考えた。学習環境をよくするために、教師や友人同士の言葉かけや誉め言葉のあり方は、重要な要素であり重要な教育コンテンツの1つである。

無意識の内に何気なく発した教師の一言で、上手な作品を目指す規範を醸し出してしまい、例えば「うまいね」「じょうずだね」という誉め言葉は、言われた子は嬉しいが、その他の生徒には、うらやましい気持ちと不得意感・苦手意識を抱かせてしまう危険性をはらんでいる。

誉め言葉は、上手ではなく、その子が工夫しながら表現した部分を誉める必要がある。これは一人ひとりの生徒にかける言葉かけにおいても共通な重要事項でもある。

苦手意識を抱かせないためにも教師や友人同士間でも誉め言葉や言葉かけは、とても重要であると考えられる。

7 おわりに一研究成果と今後の課題

平成26年度から平成28年度までの3年間の研究成果として、図工・美術に対する苦手意識の実態を把握することができた。そして、その実態調査において理由の分析と考察から、苦手意識を生み出す原因追及と共にそれをつくらない要素のいくつかを明らかにすることができた。

次にその要素をもとに実際の講義で検証することで、苦手意識を減少させることのできた有効な教育コンテンツのいくつかを開発することができた。

抱いてしまった苦手意識を払拭することは、それまでの教育の影響を色濃く受けているが故に、大学生のように過去の学習経験が長ければ長くなるほど容易くない。

子ども達に苦手意識を抱かせないためには、年齢のまだ高くない義務教育段階での重要性を改めて痛感した。

特に、小学校の中学年頃から客観的に視覚認知することができはじめ、物事を比較する能力も飛躍的に伸びる。そこでは、必然的に他の人の表現と自分自身の表現とを比較し、その相違を自覚する時期でもある。

その時期に、単純にうまいとか上手という狭い価値判断で表現を見るのではなく、多様な表現も認め合い理解できる教育を意図的に取り入れることで、その時期に芽生え始める苦手意識の芽を摘むことができると考える。

苦手意識をつくらない教育について研究を重ねる毎に結果的には、当初苦手意識というマイナス要因を少しでもなくしていくという対処療法的な方策を考察してきたが、最終的には図画工作・美術教育で最も大切にすべき

一人ひとりの児童・生徒の表現を大事にしてそれを認め合えることを実現することこそが、子ども達の苦手意識をつくらない教育であると考えられるようになった。

「図画工作・美術への苦手意識をつくらない教育とは、結果的には目指すべき造形美術教育の実現そのものである。」¹⁹⁾

この研究の大きな成果としては、苦手意識を抱かせない教育の探求は、結果的には目指すべき造形美術教育の実現に他ならないことをここに再確認できた。

今後の課題としては、この教育コンテンツをどのような授業場面で、どのように生かしていくのか、具体的な教育方法面での新たな研究課題が生じてきた。

さらに大学生だけでなく、小学生や中学生など発達段階に応じて、これらの教育コンテンツを改善する必要性も感じている。

この研究課題については、新たに採択された平成 29 年～31 年度の科学研究費補助金基盤研究 C にて、継続的・発展的に研究を深めていきたい。

*この研究は、平成 26 年～28 年度科学研究費補助金基盤研究 C(課題番号 26381173)の研究成果である。

【註】

- 1) 平成 21 年度から毎年実施している教員免許状更新講習において、学校現場の教師を対象に実態調査とアンケートを実施しており、その調査結果から明らかになっている。以下の論文で詳述している。
降旗 孝, 2011, 「学校現場における図画工作教育の課題—教員免許更新講習の実態・考察から—」美術科教育学会「美術教育学」第 32 号
- 2) 著者が担当する小学校教員養成課程の必修講義において、第 1 回目のガイダンス時に大学生を対象にした実態調査を実施している。その結果から、大学生にも図工・美術の苦手意識が存在していることがわかってきている。
- 3) 降旗 孝, 2015, 「図画工作・美術への意欲・苦手意識の実態と考察—児童・生徒・大学生の実態調査結果から—」山形大学紀要(教育科学)第 16 巻第 2 号にて、図画工作・美術に関する実態を把握するために実施した調査について、この論文によって詳しく述べている。
- 4) 武田 忠, 1995, 「学習意欲を高める基本条件」『児童心理』金子書房, p. 12
- 5) 田上不二夫, 2001, 「『やる気』の心理」, 『児童心理』, No. 753, p. 9
- 6) 花篤 實, 1994, 「子どもの文化と変容」, 『美術教育の理念と創造』黎明書房, p. 28
- 7) 平成 28 年度最終講義にて、1 年間の研究成果として苦手意識の変容に関する調査を行った。学生にはその変容をもたらした理由について書かせているが、その中で苦手意識が少し増えたと応えた学生の理由の自由記述である。
- 8) Herbert Read, 1972, “The Redemption of the Robot” H, リード, 内藤史朗訳, 「芸術教育における人間回復」, 明治図書, p. 18
- 9) Victor Lowenfeld, 1956, “YOUR CHILD AND HIS ART” ローエンフェルド, 勝見勝訳, 「子どもの絵—両親と先生への手引—」, 白揚社, p. 199
- 10) 香川勇, 長谷川望, 1997, 「子どもの絵が訴えるものとその意味」, 黎明書房, p. 180
- 11) 霜田静志, 1971, 「児童画の心理と教育」, 美育文化協会編『美術教育のすべて』, 造形社, p. 167
- 12) 降旗 孝, 2015, 「図画工作科・美術科における教育コンテンツの研究 I - 造形美術教育をより良くするための第 3 の視点 - 」, 大学美術教育学会誌「美術教育学研究」第 47 号, p. 324
- 13) 鈎治雄, 1997, 「教育環境としての教師—教師の認知・子どもの認知」, 北大路書房, p. 121
- 14) 降旗 孝, 2016 「図画工作・美術への〔苦手意識〕解消の試みと成果—目指すべき造形美術教育を実現するために—」, 山形大学紀要(教育科学), p. 26
- 15) 天野正輝, 1998, 「現代教育実践の探求」晃洋書房, pp. 60-61
- 16) 熊本高工, 1950, 「教師のための図画工作」, 河出書房, p. 59
- 17) 花篤 實, 1994, 「美術教育の理念と創造」黎明書房, p. 33
- 18) 若元澄男, 2011, 「造形環境」, 『図画工作・美術科 重要用語 300 の基礎知識』, 明治図書
- 19) 降旗 孝, 2017, 「図画工作・美術への苦手意識をつくらない教育内容—小学校教員養成課程における教育コンテンツ」, 山形大学紀要(教育科学)第 16 巻第 4 号, p. 286